

Ⅲ 家政学研究における学問発達史的検討

— 主として西政思想史よりみて —

郡女大家政 ○工藤澄子 影山彌 関口富左 高館作夫 真船均 深谷笑子

目的 高館らは学問論について述べたが、私共は学問発達史と概括し、家政学に価値導入と提唱した関口らの理論について是非と論ずる。

方法 主として文献研究による。

結果 I. 学問以前の人間の知恵—人間はその劣性と補うため火の使用、道具の発明、農牧生産等自然に働きかける行為者として自然の理に従い試行錯誤しつつ科学の土壌と創り上げた。II. 家政学に影響を与えた西政の学問—1)ギリシャの学問は観想に始まる。知性は肉体的人間と超越し、絶対的優位性ともち不滅だが、生活不在である。矛盾の指摘に始まる論証的体系は形而上学に結実した。2)中世スコラ学はその知性の上に神を据えた思弁的方法が用いられるが、アベラールは古典の矛盾を発見し、その解釈の方法として思弁の基礎に、文献的実証方法を導入し、客観性を与えて、学問的地位を高めた。3)近世の学問の方向を示唆したのはベーコンとデカルトである。ベーコンはイドラを破壊し、スコラ的三段論法批判に立つて実験に基づく科学的帰納法を提唱した。デカルトは精神と物体を実態として切り離す心身二元論に立ち、各々は客観的知識の対象となり、抽象的であって人間性は不在となる。III. 宗教と科学の次に来るもの—科学は、機械の発明と共に産業革命を促出する起動力となり世界を席捲した。物の大量生産をもたらした合理主義は人間の価値観とゆきぶりつづけ、人間と疎外しはじめた。その反省からデイルタイ、ハイデガー、ボルノーラの非合理主義的「生の哲学」が出現する。分析的家政学に反省と加え、価値の必要を確認した。